人の情語る「義太夫」現代人に魅力

発表会が近づき、けいこにも熱が入る＝大阪市中央区

news 1番

文楽太夫が初心者に指導、能舞台で発表会も

へととさんの名は十郎兵衛、かかさんはお弓と申します…

演目「傾城城阿波の鳴門」の一節が大阪市内のマンションの一室に力強く響く。月1回、初心者を対象に行っている「義太夫教室」。第一線で活躍する文楽の太夫が指導し、能舞台で肩衣をつけた太夫スタイルで発表もするなど本格的。講師の豊竹英大夫さん(61)は「義太夫は家族の情愛が深く描かれ、人間関係が希薄な現代人にとって学ぶところは多く、魅力に満ちている」と話している。

（上岡由美）

義太夫教室が始まったのは平成14年夏。最初は、「芸の勉強に」と落語家らが集まったのがきっかけだったが、やがて口コミなどで広がり、今では30代から70代のサラリーマンやOL、主婦ら約40人が稽古に励んでいる。

義太夫は、江戸前期に竹本義太夫（1651～1714年）によって確立された代表的な語り芸。さまざまな登場人物の心理や感情などを、太夫の語りと太棹三味線の音楽で表現する。大正から昭和初期にかけて素人が習うのが流行し、大阪の旦那衆のたしなみでもあった。

一時は娯楽の多様化などで衰退したが、平成15年に文楽が世界遺産に認定され、義太夫節にのせて人形を遣う文楽のファンが増え、それが高じて実際に演じたいという人たちが増えてきている。

英大夫さんは「義太夫には、日本人としてのアイデンティティーを無意識にくすぐるところがある。親の情や忠義の心など、現代の人が忘れてしまっていたものをよみがえらせる。それに、物語がわかりやすくドラマチック。日本の文化の奥深さにも気づかせてくれる」と説明する。

「グルメも海外旅行もいろいろやって、最後にはまったのが義太夫。物語に流れている人の情を語ってみたかった」「教養も高まるし、意外にも大きな声が出せて気持ちよかった。ストレス解消にもなる」と反応は上々だ。

稽古は体をほぐす軽い体操から、腹筋力をつける腹式深呼吸による発声練習を行う。その後、実際に英大夫さんが舞台で使っている床本のコピーを見て、大きく口を開け何度も同じところを節をつけて語る。時間は約90分。入会金はなく、受講料は1回につき3000円。

23日には国の登録文化財にも指定されている「山本能楽堂」（大阪市中央区）での発表会も。演目は「絵本太功記」などを予定している。